

# 鹿児島県の民家調査

建造物研究室・平城宮跡発掘調査部

鹿児島県教育委員会とともに同県の民家緊急調査を実施し、鈴木（主任調査員）・沢村・細見が参加した。第一次調査は各市町村の調査員が当たり、96市町村中53カ所からリストが提出され、263棟が報告された。第二次調査は県在住の調査員が60棟を選定して調査を実施した。その結果にもとづき、32棟について1972年度に第三次調査をおこなった。文化庁建造物課による歴史的集落の景観に関する予備調査も同時に行なわれ、その一部は両者の協力によった。

鹿児島県は地理上大別して、県東半の大隅地方、西半の薩摩地方と南西諸島に三分できる。また階層上から、旧侍および上級郷士・郷士および農家

・小規模農漁家の区別ができるほかに商・工・漁業の町家がある。

形式からは分棟・直家・曲家・町家などがある。分棟型は南西諸島を含め県全域に分布し、県内古民家の最大多数を占めるが、地域によって特色がある。薩摩北部ではオモテもナカエもともに平入で、棟を同一方向に揃えるものが多く、薩摩半島知覧町一帯では両棟の間にテノマがなく落棟で屋根をつなぎ、オモテのナカエ側の妻に玄関を設ける形の民家が（知覧型）大半である。また南西諸島では各棟がまったく分離したり、テノマがなく渡廊下でつながるもののが普通である。直屋は大隅地方山間部一帯に点在し、曲屋は稀であった。町家はすべて平入りのもので、古いものは少なく、坊津町の二棟のみを調査した。

建立年代の確実なものは少なく、享和三年（1803）墨書きのある横川町折田家は、侍屋敷で分棟型のオモテのみが残り、普請文書で明治31年建立の経過のわかる知覧町竹之内家は知覧

第1図 鹿児島県民家分布図

第2図 入来町 黒武者家外観

第3図 鹿児島県の群倉

## 鹿児島県の民家調査

型で養蚕を目的としたやや大規模なものである。ほぼ年代の確実なものとして、文久二年（1862）の坊津町森家は、舟主の町家で、優れた造作をもち、嘉永（1850年頃）頃の東町久保家は上級郷士の分棟のオモテのみ現存している。これら二棟は修理時などに棟札を発見した記憶があるといわれ、推定経年もこれに合致する。坊津町の平原家も舟主の大規模な町家で、万延元年（1859）の棟札があったといわれるが、みかけの年代はそれよりやや古そうに思われる。建立年代が17C以前に遡るものはなく、もっとも古いと思われる大口市禪答院家（上級郷士）は大型の分棟式で、広間型三間どりと類似したオモテをもち18C初期とみられ、知覧町森家は知覧型のオモテのみであるが、18C後期と思われる整形四間どり型の良質の座敷を残し、庭園はかって名勝の指定をうけていたものである。また、入来町黒武者家は郷士で分棟型のナカエに18C末期のものを残し、この階層のナカエでは県内でもっとも古い。建立年代は19C中期であろうが、根占町野嶽家は山村の小規模民家で主な構造柱はすべて掘立柱とされ、床も現在は竹座であるが、下に土壇状に築きあげた土間床がほぼ建物全面に残り、当初は土座であったと思われる。平面は広間と小室二つのみの簡単なものに復原でき、古い形式を遺存している。

平面形式では、山間部の直屋はおおむね小規模で広間型三間どりが明治まで造られている。分棟型でもオモテに広間型三間どり類似のものと整形四間どり類似のものとがあるが、階層別にみて上層のものは18C中に広間型三間どりから整形四間どりに変化し、小規模なものは19Cにも三間どりのものが多い。このことは先年調査した宮崎県の場合と同様である。

南西諸島では建立年代の特に古いものはなく、良質のものには移築したものが多い。これは虫害などに強い堅木の太く良質な材木が得にくいためと説明されている。特殊な構造と外観で知られる高床の倉は、奄美大島大和村の群倉は解体の危機にあり、他の各民家に付属しているものも移築されたものが多く、大型で柱数の多いものは稀になっている現状である。

（沢村 仁）

- 1 入来町 黒武者富士夫家復原平面図 分棟型
- 2 大口市 禪答院重幸家復原平面図 分棟型
- 3 知覧町 竹之内実行家現状平面図・星根伏図 知覧型
- 4 坊津町 平原ヒメ家一階復原平面図 町屋
- 5 財部町 堀内良忠家現状平面図 町屋
- 6 根占町 野嶽仲吉家復原平面図 町屋

第4図 鹿児島県民家の平面